

読解力・文章表現力 向上のための語彙教育

——外国学生用日本語教科書『分野別用語集』
を使った授業の試み——

山下喜代

1. はじめに

小稿は、読解力や表現力向上の基礎となる語彙力の伸長を目的として行った日本語授業の報告である。

報告の対象となる授業は、早稲田大学別科日本語専修課程の1997年度後期上級2クラスの「語彙」の授業と、1998年度前期文章表現VIAクラスの授業である。これらの授業ではテキストとして『外国学生用日本語教科書分野別用語集』（1996年早稲田大学日本語研究教育センター編。以下では『用語集』と呼ぶことにする）を使用した。小稿の目的は、この『用語集』をテキストとして使用した授業を検証し今後の授業改善に役立てることである。さらに、『用語集』をより使いやすい語彙学習のテキストとするための改善点の洗い出しに役立てようとするものである。なお、この『分野別用語集』の語彙については、野村雅昭・山下喜代(1998)で報告を行っている。

2. 授業の内容と方法

2.1 97年秋学期上2「語彙」クラス

時間:

(木) 3限・4限(90分×2) 計11回(22コマ)

学習者:

16名(中国3, 韓国5, ドイツ2, アメリカ・スウェーデン・タイ・ロシア・イタリア・オーストラリア各1)

目的:

読解力と表現力を向上させるために語彙力を増進させること。授業では、できるだけ四技能の練習をすべて取り入れるようにする。

教材と学習分野:

『分野別用語集』と『英語で話す日本 Q & A』¹⁾ の日本語文を教材に、『用語集』の「行事、職業・仕事、生産・産業、経済、政治、法律、心理・感情」の7分野を学習。

授業内容:

授業は予習を前提として進めた。学習者は、その週の学習分野に予め目を通し、分からない語句はできるだけ調べておくこととした。通常授業は以下のような流れで行った。

① その分野に関するトーク。

例えば「行事」であれば、日本の行事や休日についてどのくらい知っているかを尋ね、見たり聞いたりした経験を自由に話してもらう。このトークによって学習者のその分野についての語彙力のある適度知ることができる。

② 『用語集』の語句についての解説。

『用語集』の語彙について、予習で分からなかったことを質問してもらい、教師がそれを説明する。学習者の半数以上は予習をしてくるが、中には全くしてこない者もいる。予習をしてこない学習者は、分からない語句が多すぎて予習をする気になれない場合と、ほとんどの語句がすでに理解語彙になっている場合があるようである。予習をしていないと、分からない語句がありすぎて質問が出来ないということもあるが、たいていは次々

1) 『英語で話す日本 Q & A』(1996) 講談社インターナショナル

と質問が出され、その解説に多くの時間が割かれることになる。従って教師の発話時間が長くなり、学習者は聞き役に回ってしまうという状況に陥りやすい。適当に教師の方からも学習者に問い掛け、理解度を確かめるとともに、学習者の発話の機会を増やすようにした。学習者にしっかり予習してきてもらい、この説明の時間をできるだけ少なくしたいというのが教える側の期待するところであったのだが、授業時間の3割はこの説明に費やされた。質問の多くは、慣用句やことわざの意味や類義語の使い分けについてであった。これらは、学習者が各種の辞書を使い分けて予習するのが時間的にも日本語の能力から考えても困難な内容と言えるかもしれない。後に述べる授業終了時のアンケート調査の回答で、この説明が勉強になったという者が比較的多かったのは、救いだった。

③ 平易な文章の読み。

その分野に関する短い平易な文章を読む。教材は『英語で話す日本 Q & A』（講談社インターナショナル）の日本語文を利用した。内容は、分野ごとに日本に関して出された質問に答えるというスタイルで書かれている。文章の読みを取り入れたのは、文章の中で語彙の定着を図ると共に、日本事情の理解を深めることも意図したからである。使用した文章の例を挙げると以下の通りである

Q: 日本人はいつから洋服を着るようになりましたか? 「衣服」

Q: 日本ではどんな結婚式が一般的ですか? 「行事」

Q: 日本では転職する人は多いですか? 「職業・仕事」

Q: 日本の農業は、戦後、どのように変わってきたのですか? 「生産・産業」

Q: 日本経済が強かった理由は何ですか? 「経済」

Q: 首相はどのようにして選ばれるのですか? 「政治」

Q: 日本の警察にも FBI のような組織はありますか? 「法律」

④ ペアでインタビューによる口頭表現の練習。

学習分野に関係するテーマを与え、ペアでインタビューを行いお互いに

情報を集め、それを記録するという課題を出した。インタビューではできるだけ『用語集』で習った語句を使用するように指示したが、個別の質問事項は示さず、学習者の興味に従って自由な話し合いをさせた。ペアは違う国の学生同士の組み合わせにした。インタビューのテーマを例に挙げると次の通りである。

Q: あなたの国の冠婚葬祭について教えてください。「行事」

Q: あなたは今までにどんな仕事をしたことがありますか。「仕事」

Q: あなたの国の産業について教えてください。「産業」

Q: あなたの国の「政治体制 / 議会制度 / 公務員制度 / 選挙制度」について教えてください。(政治)

また、「心理・感情」を扱った授業では、ペア練習ではなく、グループワークを行った。4人ずつのグループに分かれ、「喜怒哀楽」アンケートをしてその結果を発表した。これは、グループの各人が、日本で生活してどんなときに喜怒哀楽を感じたか、その経験を答え、その結果からそのグループを特徴付けるグループ名を「○○派」と名づけるという内容であった。「気持ち大切派」「人間関係派」「お金大好き派」などのグループ名が付けられた。

⑤ 文章表現の練習。

インタビューで集めた情報のメモを参考に、その内容を正しい文章にして提出した。時間がない時は宿題にした。提出後、教師が添削して返却した。

⑥ 復習テスト。

分野の学習が終わると語彙の定着を計るため毎回復習テストを行った。内容は、語句の読みと連語や慣用句に関するもので、漢字での表記は出題しなかった。『用語集』は漢語の比率が高く²⁾、非漢字圏の学習者にとっては、読みと意味を覚えるだけでもかなりの負担になるので、漢字で書ける

2) 野村・山下(1998)によると、『用語集』の見出し語 6,511 語の内、3,632 語(55.8%)が漢語である。

ようになることは目標としなかった。6回の復習テスト(最後の「心理・感情」はテストをしなかった)の平均点は、100点満点で最高が97点、最低が46点、クラス全体では71点であった。

評価:

評価は、復習テスト・期末テスト・課題の提出・出席・授業態度を総合して行った。期末テストの結果は、受験者12名、100満点で最高95点、最低45点、平均は76点であった。

2.2 98年春学期 文章表現 VIA クラス

時間:

(木) 3限(90分) 計11回(11コマ)

学習者:

16名(アメリカ4, 韓国2, ドイツ3, タイ2, インドネシア・オーストラリア・スウェーデン・カナダ・ロシア各1)

目的:

文章表現力向上のために語彙力を増進すること。

教材と学習分野:

『分野別用語集』の「食事, 衣服, 住居, 人物, 趣味, 生理」の6分野。

授業内容:

授業の進め方は基本的には、前年度と同じであったが、時間数が半分になったため、文章の読みの練習をほとんど行えなかった。この点には、後で述べる授業終了時の授業についてのアンケート調査で不満の声があった。また、文章表現の授業ということで、時間の配分では口頭表現の練習時間を少なくしたり省略して、語句の意味・用法の解説と習った語句を使っての短文作りや作文などの文章表現の練習をするようにした。作文のテーマは以下の通りである。

- ・私の国の食べ物について——日本の食べ物と比較して「食事」
- ・私の国の住宅と日本の住宅を比べて「住居」

- ・一人の個性的な友人について「人物」

評 価:

評価の対象は97年度と同じ。4回の復習テスト(初回の「食事」はテストなし。「衣服」と「住居」は、まとめてひとつのテストになっている)の平均点は、100点満点で、最高が94点、最低が41点、クラス全体の平均点は76点であった。期末テストの結果は、受験者15名で、最高89点、最低36点、クラス平均が70点であった。この結果は97年度とそれ程大きな違いはなかった。

3. 指導の反省——授業終了時のアンケート調査を中心にして

3.1 アンケート調査の結果

97年度秋学期、98年度春学期ともに、授業終了時に授業及びテキスト『分野別用語集』について、学習者を対象にアンケート調査をした。

97年度は自由記述の形式で、また、98年度はアンケート用紙を用いて行った。

〈97年度の結果〉

97年度のアンケートでは、16名中9名から回答があった。自由記述による回答で寄せられた意見や感想をまとめると以下のようである。

(授業について)

- ・いろいろな分野の単語を学びながらそれについて作文するのはよかった。単語の実力を上げるのに役立った。
- ・予習をしないことが多くて、授業中よく集中できなかった。しかし、テストをとおしているいろいろ勉強になった。
- ・授業はとても有益だった。特に用語の説明が理解しやすかった。
- ・語彙について詳しく説明してくれたのでいろいろな語彙が覚えられた。
- ・詳しい説明がよかった。
- ・単語の使い方の練習をしたほうがいい。

- ・勉強の速度が速くて、覚えられない言葉がたくさんあった。
- ・前の週に習ったことの試験があったのはよかった。
- ・毎週テストをするのはいい。
- ・毎週するテストのための勉強が大変だった。
- ・毎回のテストでとてもプレッシャーを感じた。
- ・テストをもうちょっと簡単にすればいい。
- ・宿題の量が多すぎた。
- ・宿題がほとんどなかったので家で勉強しないで過ごしてしまった。

(テキストについて)

- ・日常生活であまり使わない言葉が多い。もっと生活の中でよく使われる言葉を加えたほうがいい。
- ・語彙の分類によって編纂されており、いい教科書だと言える。難しい言葉の下に例文をつければもっと分かりやすくなる。
- ・教科書は大体良い教科書だと思うが、言葉が多くて全部覚えることができない。同じ意味の言葉がたくさん出ていて、どれが一番大切でよく使われるか知りたかった。よく使われる言葉はボールド体で書いてあれば良かった。
- ・似ている言葉の使い方について説明が書いてあったらよかった。
- ・同時にたくさんの言葉を覚えなければならないのでとても大変だった。
- ・テキストは非常につまらない。もっと創造的なテキストで勉強したいと思った。単語がたくさんありすぎて、楽しく勉強するのはちょっと無理だと思った。
- ・テキストにあまりにもたくさんの単語が書いてあって、ちょっと飽きてしまうようなことがあった。

〈98年度の結果〉

98年度のアンケートは「『分野別用語集』を使った授業についてのアンケート」と題して行ったものである。

98年度は16名中9名の回答があった。この16名の中で5名は、97年度「上2 語彙クラス」の履修者である。アンケートは1.2.4の問いが「はい/いいえ」で回答する項目、3.5.6.7.8が自由に回答を記述するものである。それぞれについて以下に結果や回答例を示す。

1. これまで語彙の学習を中心にした授業を受けたことがありますか。

はい4 / いいえ5

2. あなたの語彙力は増進したと思いますか。

はい5 / いいえ4

3. どうしてそう思いますか。

「はい」の回答例

- ・ 諺の意味が分かるようになった。
- ・ テレビのニュースを見る時ずいぶん分かるようになったし、本を読む時に熟語の読み方や意味が分かるようになった。
- ・ テストによって覚えていない語彙がはっきりしてきた。
- ・ 言葉の使い方や日本の伝統的な言葉などが分かるようになった。

「いいえ」の回答例

- ・ 語彙の数があまりにも多かったので、かえって混乱しやすくなった。
- ・ 言葉のニュアンスを説明してくれたのは役に立ったが、実際に使える機会が未だに少ない。
- ・ 語彙がいっぱいすぎて、新しい単語も文脈なしで書いてあるので覚えにくく、覚える気もなくなってきた。

4. このような用語集を使用した授業は、日本語力を高めるために役立つと思いますか。

はい7 / いいえ2

5. どうしてそう思いますか。

「はい」の回答例

- ・ 言葉のニュアンスが分かるようになるために便利だ。
- ・ 日本語力を高めるためには語彙力、特に漢語の知識を高めることが必

要だから。

- ・その言葉をテストのためではなく、日常で使うことができれば役立つと思う。
- ・あまり日常会話では使わないので効果的ではないが、まあまあだと思う。
- ・分野別になっているので量は多いが、一回目を通しておけば役立つ。初級の人はもちろん、中・上級の人も基礎固めのつもりできちんと勉強した方がいい。
- ・分野別に集めてあるので覚えやすかった。
- ・ほとんど同じ意味の言葉で使い方が違うものを知るのに参考になる。

「いいえ」の回答例

- ・先生から教えてもらわなければならない単語が多すぎる。
 - ・毎週勉強した単語の数がたくさん過ぎるから、短期的には勉強になるが、長期的にはその大部分を忘れてしまうだろう。
6. 『分野別用語集』のテキストの内容について、意見を書いてください。

- ・とてもいい本だと思うが、語彙が多すぎる。
- ・意味を理解するための情報も欲しかった。
- ・内容としてはいいと思うが、どういうふうに学生に覚えさせるのかは、先生にもっといい方法を見つけてもらいたい。
- ・話し言葉と書き言葉の区別が分かるとよかった。
- ・重要な単語にマークをつけたり、慣用句に説明を書いたりした方がいい。
- ・基礎固めをするための本としてとてもいい。
- ・いまの『用語集』はいいと思うが、もっとレベルの高いテキストも作ればいい。それにはもっと応用的な慣用句や決まり文句も入れて欲しい。
- ・意味を調べるのに時間がかかるので英訳でもあればいい。

- ・日本の伝統的な語彙(例えば「たすき」など)は諺以外あまり役に立たないと思う。
- ・分野別の分け方はいいと思うが、単語が多すぎる。
- ・分野によって違うが、あまり使われていない言葉も数多く出ている。

7. テキストにはたくさんの分野の語彙がありますが、学習した分野についてはどうでしたか。意見を書いてください。

- ・これまで勉強していなかった食事や衣服などの基本的な語彙を学習したのはよかった。
- ・目次を見ると他の分野を学習した方が日常的に役に立ったのではないかと思う。
- ・学習した分野は全部よかった。帰国後もっと復習したい。
- ・いつか全部覚えたいと思う。
- ・97年度の秋学期と98年度春学期に習ったものを合わせると、ある程度十分だと思う。
- ・経済や政治のような分野の単語は、新聞を読む授業で覚えられるので、この授業の選択は適切だったと思う。
- ・政治などの堅い分野の言葉は他の読解などのクラスで参考になったかもしれない。

8. この授業で良かった点とあまり良くなかった点について自由に書いてください。

(良かった点)

- ・自分の日本語力(書く力)を改めて気づかせてもらったこと。
- ・先生の説明が良かった。
- ・決まり文句の説明などがよかった。言外の意味を知ることができた。
- ・毎週少なくとも短い文章を書くのは勉強になった。
- ・テストが勉強になった。

(良くなかった点)

- ・新しく面白いプリントをもっと読みたかった。

- ・期末テストの問題が長くて詳しすぎた。
- ・期末テストのような問題(例えば助詞の使い方や短文作りなど)の小テストがあればよかった。
- ・英語圏の人には悪いが、授業のスピードが遅いような気がした。
- ・大切な単語だけ選んで、他の文脈での使い方などの練習をしたかった。
- ・テストが大変だった。
- ・学習する用語があまりにも多かったため、身に付けることが難しかった。
- ・『分野別用語集』を使ったのは授業の問題点と思われる。
- ・習った語彙を使って書く練習や、記事などの文章での使い方が分かる練習があればよかった。

3.2 指導の効果と問題点——アンケート調査の結果から見て

97年度の自由記述によるアンケート調査の回答の内容は、大きく分けて3点に絞ることができる。第1が「用語の詳しい説明がよかった」ということ、第2が「分野ごとにテストがあったのがよかった」ということ、第3が「テキストの語彙が多すぎる」ということである。アンケートの回答から見ると、テキストに対して強い不満を持つ学習者がいたことも確かであるが、授業は概ね好評だったと言える。97年度は2コマ続きの授業であったため、「語句の意味・用法の解説」に加え、学習分野に関する「フリートーク」「文章の読み」「インタビュー方式による口頭表現練習」「文章表現練習」というように、毎回の授業に4技能の練習を取り入れ変化のある授業展開をすることができた。このことが功を奏したと思う。また、学習者については16人中8人が漢字圏の学生であったことも、漢語の多い『用語集』に対する拒否反応が少なかった理由と思われる。それでもやはり、収録語数が多いと、どれを優先して覚えるべきなのかということについての情報が欠けている場合、学習者の学習意欲を削ぐ結果になることは明らかなようだ。テキストにその情報がない以上は、教

える側が何らかの基準に従って語彙を選択し、使用語彙と理解語彙の区別をつけ、その情報を教える必要があるだろう。

98年度のアナケートからいくつかの特徴的な結果について述べることにする。98年度のアナケートは、学習者16名中3名が漢字圏(カナダからの留学生は台湾出身)、13名が非漢字圏の学生であった。学習者自身の評価では、自分で語彙力が増進したと思っている学生は約半数にとどまっている。増進したと思えない理由としては、語彙の数が多すぎて覚えられなかったという挫折感によるものが多い。実際は、分野ごとの復習テストで平均して76点はとれているにも関わらず、自己評価はなかなか厳しい。『用語集』を使用した授業については、日本語力を高めるのに役立つと、肯定的に捉えている者が9名中7名おり、テキストに対しての期待は高い。『用語集』の内容についての意見は大きく2点にまとめられる。すなわち「語数が多すぎるので整理して欲しい」「意味に関する情報が欲しい」ということである。

語数が多すぎるという点であるが、野村・山下(1998)によると、『用語集』には慣用句も含めて約8,500語が収められている。この語数は、このテキストが中級以上、特に上級学習者の利用の便を考慮した用語集である以上、格別多いとは言えない。学習者が語数の多さに閉口するのは、指導方法に問題があると思われる。『用語集』を自分で予習してくることを前提にした授業は、真面目で熱心な学生に過重な負担を感じさせ、かえって意欲を減退させるのかもしれない。教師側で覚えるべき語句をある程度選択して提示し、それらの語句について意味や用法を解説するというやり方も検討する必要があるかもしれない。その場合、何を基準にして語句を選定するかが重要になってくるだろう。

授業については、「語句の説明」「文章表現練習」「テスト」などが評価され、一方で、問題点として挙げられているのが、「読解」や「文章表現練習」が不十分だったことである。これは、ひとつには98年度が文章表現の授業であったため、文章の読みにあまり時間を割けなかったことによ

る。また、時間数が97年度に比べ少なかったために、学習した語句を使って短文作りの練習をするなど、定着のための訓練がほとんどできなかったことも不満を残すことになった原因であろう。さらに97年度と同様に『用語集』をテキストとして使用したのは授業の問題だとする意見もあった。『用語集』を教室活動におけるメインテキストとして使用することの適否は改めて考えてみる必要があるだろう。

4. 『分野別用語集』をテキストとして使用した授業について

日本語の学習コースにおいては、語彙学習が単独になされることは少なく、多くの場合「発音・文字・文法(文型)」や「日本事情」などの学習項目の中に組み込まれているのが実情であろう。技能別に見ても、読解・聴解・口頭表現(会話)・文章表現(作文)の授業の中で語彙力の増強が図られる。そのような状況で、97年度の語彙の授業は、上級学習者を対象に集中して語彙量を増やすことを目的に計画された。榎山洋介(1997)が述べるように上級における語彙習得の課題は、「未知の語を貪欲に習得し語彙量を増やすとともに、初級・中級レベルで既に一応(断片的に)学習している基本語(基本語彙)を質的に高めるということ」と言える。語彙量を増やすことと既習基本語彙の知識を質的に高めるための指導方法は当然違ったものになるだろう。榎山(1997)では、後者の場合の指導方法の例が示されているが、小稿での報告の授業は前者を目的とするものであった。そのために『用語集』をテキストとして使用し、大量の語彙を提示し、その中で既習語彙を確認し、いくらかでも、未習の語彙が少なくとも理解語彙として、できれば使用語彙として定着することを目指したのである。しかし、個々の語句について、意味や使い方を確実に習得させるためには語彙の量的な面ばかりではなく、質的な向上を考慮した指導も不可欠であろう。

倉八順子(1996)では、人が未知の語句に接した場合の語句処理にTOP-DOWN処理とBOTTOM-UP処理の二つがあり、人は、情

報の意味に注目してこれらの能動的処理を行うことによって、その情報の構成要素である語句を確実に習得することが可能になると述べている。ここで言う TOP-DOWN 処理とは、文脈全体の理解によって語句の意味を推定するような語句の処理過程のことである。これに対して、BOTTOM-UP 処理は、部分の情報を手がかりに全体を推定する方法である。そして、初級の指導法では、この二つの処理法を適切に用いることが重要としている。一方で中・上級の学習者においては、豊富な情報を与え、文脈全体の理解によって語句の意味を推定するような TOP-DOWN 処理に習熟させる機会を付与するとともに、それらの語句を使用する作業を課すことによって、語句の処理が深まり、語句の習得が高まると述べられている。『用語集』は、BOTTOM-UP 処理の能力を高めるために活用できる内容であろう。意味的あるいは語構成的に共通する語句がさまざまなレベルでグルーピングされ提示されているからである。中・上級レベルにおいてもひとつの語句を手がかりに、その語句に関連する語句を想起し、それらの連鎖によって習得語彙を増やしていくことも必要であろう。むしろ、中・上級だからこそそのようなやり方が可能とも考えられる。もちろん、『用語集』に不足している「豊かな文脈」を様々な副教材の工夫や指導法の工夫によって補っていかねばならないことは言うまでもない。

5. おわりに

小稿では、主に学習者によるアンケート調査の結果を参考にして、『分野別用語集』を使った授業を検討した。授業計画や実際の指導方法についても改善すべき点が明らかになったような気がする。また『用語集』の改善すべき点もかなり見えてきたと言える。今後の最大の課題は、『用語集』の中のどの語句を取り上げて、質的に高い情報を与えるかということを検討することだろう。また、『用語集』を使った授業によって学習者の語彙力がどのくらい向上したのかという点については、アンケートの中で、学

習者自身による評価を書いてもらったが、それは多分に主観的な評価であった。客観的に評価するための方法を考えることも残された課題である。

以上に述べたように、小稿は読解力や表現力向上の基礎となる語彙力の伸長を目的として行われた日本語授業の報告であった。しかし、そもそも言語能力において読解力とか表現力と表される能力とはどのような力なのか。そしてその読解力や表現力を支える要素としてどのようなものがあり得るのか。その中で、語彙についての知識や運用力がどの程度の比重を占めるのか。本来なら、そう言った前提となる議論があって初めて、読解力・文章表現力向上のための語彙指導について、その内容や方法が検討されるべきなのだろう。小稿においては、その点についての考察が不十分だったことは否めない。すべて今後の課題と言える。

参考文献

- 倉八順子(1996)「語句の指導」(『日本語学』VOL. 15. 8 明治書院)
野村雅昭・山下喜代(1998)「外国学生用日本語教科書『分野別用語集』の語彙」
(『講座日本語教育 第33分冊』早稲田大学日本語研究教育センター)
榎山洋介(1997)「語彙指導の方法」(『上級日本語教育の方法』凡人社)